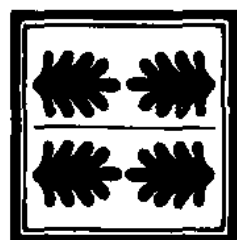


村上元三

佐々木小次郎
(下)





講談社文庫

定価 480円

佐々木小次郎(下)

むらかみげんぞう
村上元三

昭和53年3月15日第1刷発行

昭和57年11月30日第6刷発行

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策・菊地信義

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社若林製本工場

© Genzo Murakami 1978

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えます。

ISBN4-06-131441-6 (1)

佐々木小次郎(下)

村上元三

講談社

目次

雪の花々	七
万華鏡	三
くもの糸	四
恋の影	三
その前夜	四
鬼火の茶	六
修羅の図絵	三
北東微風	九
秋霜剣	二
鯉魚の城	二
うろこ雲	五
武者人形	二

二六	二〇	一五	一六	一四	三	六	四	三	四	三	七
----	----	----	----	----	---	---	---	---	---	---	---

野路しぐれ

二三八

岸柳

二六〇

果ては白雲の

二八二

修道士トマス

二八九

春待月

三〇七

花風

三三三

四月十三日

三五二

海つばめ

三六六

浜ぐるま

三八九

解説

武蔵野次郎

三九四

年譜

磯貝勝太郎

四〇六

佐々木小次郎
(下)

雪の花々

堺の町の南橋に近く、東半町から南高須町へかけて、遊女町がある。ここが、乳守廊ちもりくろわとも呼ばれ、大坂の天満や玉造たまつくり、江戸の柳町、京の三筋町などの遊び場所よりも品格がある、といわれている高須の傾城町であつた。

隆達りゅうたつの小唄、歌曲の宮尾道三、三絃の中小路けんぎやう検校など、遊芸の名手もさかんに出ている堺の町だけに、遊びの場所にも芸をわきまえた女たちがいくらもいる。

遊女屋は、入口がせまく、軒のきにかけた行燈あんどん、屋号を染めぬいたのれんをくぐって土間に入ると、奥行は深く、隠れ遊びの客には都合がいい。

大場甚内は、千守ちもりという遊女屋で、これで三日、酒と女のただら遊びを続けていた。

手切れの意味で、曾呂利そろりがくれた金が、甚内のふところを豊かにしている。金が入ってみると、小次郎を討果す前に先ず酒と女を、と甚内にも世間並の欲があつた。

しかし、どこへ行っても、自分が女に好かれないのは、甚内にもわかつてゐる。女は、男の欲を満たす道具であればいい、としか甚内は考えていない。

剣道だけは、諸岡一羽の流れをくむ神道流の奥義に達し、関ヶ原合戦のときには石田方の陣に加わったばかりに、出世をする機を失ってしまった大場甚内にとって、今までに一ばん華やかであつた時代は、大坂にいたころだつた。

我欲が強く、執念深い甚内には、人から頭分に奉られるだけの人望はなかつたが、弟の弥二郎は、それを持っていた。だから、弥二郎があぶれ者の浪人たちを集めてきて、徒党をつくり、甚内を頭領に押し立てているあいだは無事に行つた。

それが、小次郎のために弥二郎が討たれたあと、甚内は翼をもがれた鳥のようになって、仲間の浪人たちにも離れられてしまい、運の悪いほうへばかり追いやられた。

こうなつたのは、あの小冠者のせいだ、と甚内は一図に小次郎を憎み、追い回した。関ヶ原の浪人仲間からすすめられて、山伏のすがたになつてみたものの、那智山での小次郎襲撃に失敗すると、すぐに元の浪人に逆もどりをした。

反省などということは、みじんもしたことのない大場甚内だけに、ともかく小次郎を討果さねば自分の不運は救えないのだ、といつの間にか、そう思いつめるようになっていた。

千守に泊ってから最初の朝、甚内は編笠に顔をかくして、小次郎の住家のまわりをさぐつてみた。少林寺農人町の小次郎の家は、この高須から五町しか離れていない。

地の利をたしかめ、夜になつてから甚内は、また小次郎の住居に近づいた。一気にとび込んで小次郎を切ろう、という積りでいた甚内が、どきつと足をとめたのは、長屋門の前、土堀の下、裏口などに、見張りらしい、しかも侍のすがたが一つずつ、雪の上に黒くじつと立っていることだつた。

あくる晩も、そして昨夜も、見張りの立っているのは同じであつた。

「おのれ小次郎め、おれが近づいたのをきとつて、用心をしていると見える」

やむなく遊女屋へもどつてきてからも、大場甚内は、腹の中が火になつたような気持で、やたらに酒をあおつた。

見張りなど切り伏せてとび込もう、と思わぬでもないが、しかし、對手は家の中にどんな用意をしているかわからない。それに甚内としても、単身で小次郎に立向うとなれば、不意討のほかには勝算はない、とわきまえていた。

「大そうご機嫌の悪いこと」

今日も朝から酒をあおっていると、初音という遊女が部屋に入ってきて、ばかにしたような笑い声を立てた。

じろつと眼をくれたきり、甚内は酒をのんでいた。眼がすわって、青ずんだ土気色の顔が、余計いやな人相に見えている。

「歌でもうたつたらどうだ」

甚内がそういうと、初音は、ふんといった顔をした。

どうせ金で買った女だ、と思つてはいるが、向うもそのつもりで、甚内に親切にしてやろう、などという気は無いに違いない。

ぶくぶくとよく肥つて、色の白い、愛嬌のいい顔はしているが、人のよさそうに見えるこの初音という遊女が、頭から甚内をきらっているのは明らかだった。

「よう積りました」

障子のほうへ、白々と顔を向け、初音がそういったのは、雪のことであろう。

「お前さまは、今日もここでお遊びか」

素気なく聞かれて、甚内の顔にどす黒い血の色が一時につきあがった。

「おのれは」

いきなり甚内は、酒の膳をひっくり返し、初音にとびかかって畳にねじ伏せた。

「何をなさる」

金切声でさけぶ初音の髪をつかんで、甚内は、そこらを引きずり回した。

「金で買われた客を、あざけたな、おのれは」

悲鳴をあげる初音の、肉づきのいい身体を、甚内はやたらに蹴った。

店の者や女たちが、廊下を走ってきたが、障子をあげたきり、だれもとび込めず、わいわいさわぎながら立ちすくんだ。

「おのれ、どうしてくれよう」

いらいらして、山犬同然に、人を見れば食いついて行きたい気持になっているだけに、甚内は、自分でもわけがわからないほど猛り立った。

「ぶち切ってくれる」

初音を突きとばして、甚内は、いきなり脇差を抜いた。

「人殺しっ」

押しつぶされたような悲鳴をあげて、初音は、部屋からころがり出た。
店の者たちも、あわてて廊下を逃げ出した。

「待て、おのれたち」

細長い廊下を、めくら滅法に追って行くうち、甚内の前に男が一人、ぬつと立ちふさがった。

「おっ」

突き当りそうになってから、甚内は思わず声をあげ、いそいで飛び退った。

ただ立ちふさがったただけではなく、ぶつかれば跳ね返してくる力を持った對手だと、すぐに甚内は感じとったからだった。

「なんだ、おのれは」

それでも甚内は、脇差を引いて、齒をむき出した。

對手は、鍛^{いじろ}のついた黒い頭巾^{ずきん}から、眼ばかり出している。甚内よりもはるかに背が高く、肩幅もひろい。蝙蝠^{こうもつ}羽織に、袴をつけ、大刀を鞘ごと左手にさげているのが、まるで岩が立ったような感じがする。

甚内に怖れを抱かせたのは、頭巾からのぞいているその眼だった。まだ若々しいが、ひやりとするほど、冷たく光る。隙があるとかないとかいうのではなく、実戦の経験を数多く踏んだ甚内が直ぐには押し返せないほど、その眼は、ふしぎな圧迫感を持っていた。

「大場甚内という男だな、おぬしは」

と、その侍は、眼から受けるものとは違った、女のように優しい、しかし、ひたつと落ちついた声をかけて、

「遊女屋で、そのような暴れ方をしては、よけい為にはなるまい。奉行所からも、手配が出ている。どなたのお指図か、いわずとも判るだろう」

そういわれて、甚内は、すぐには言葉が出なかった。

気がつくつと、せまい廊下の、その頭巾の武士のうしろに、五人ほどの男たちが、すぐにも飛びかかるような身構えで立っている。浪人体の男もいるし、船乗らしいたくましい若者も見え、二重に甚内は手足を押えつけられた氣持になった。

對手は、曾呂利とつながりを持っている人間に違いない。そう気がつくつと甚内は、一時に水をあびせられた思いがした。

「ふん」

甚内は、いやな眼つきをした。

「もはや、だれの指図もうけぬおれだ。あらためて会おう、貴様とは。名乗れ」

それには、頭巾の中からひくい笑顔を返したきりで、對手は背を向け、廊下を横へ入っていった。

うしろから甚内の切りつける隙は無かったし、五人の男たちが、ずっと出てきて甚内の前に立ちあがった。

「勝負は預けてやろう、今日だけは」

はき出すようにいって、甚内は、脇差の抜身を下げ、自分の座敷に引返していった。

五人の男は、頭巾の侍のうしろから、横の廊下へ続いた。すぐ突き当りに、陽当りのいい、はなれた座敷があり、客を迎える用意が出来ていた。

頭巾の侍は、上座に坐った。

「あれだ、佐々木小次郎をねらっている奴は」

つぶやきながら、頭巾をぬいだ下から、那智丸なちまるの顔が現われた。

続いて座敷に入ってきた五人は、とりどりの姿をしているが、みな和泉丸の者たちであり、那智丸の配下だった。

「曾呂利様は、あの男を殺せ、と申されたものではありませんか」

と、浪人体のひとりがいった。

那智丸は、黙っていた。

海の上で暮しながら、この男の皮膚は陽にやけるといふ事がほとんど無く、こうして障子越しの陽の光を受けていると、顔は能面のような感じがする。それだけに、深い水の色に似た眼は、よけい不気味であった。

「おれは、佐々木小次郎と、敵になるかも知れぬ」

と、ぼつりと那智丸はつぶやいて、

「その時が来たら、大場甚内という奴、役に立つ」

それには五人とも、物も言えず、たがいに顔を見合せていた。

今日、那智丸が市之町の曾呂利屋敷を訪ねたことは、ついていった五人は知っている。

和泉丸は、ゆうべ、堺から南へ四里、岸和田城下の近くにある佐野という小さな港にそつと入って、那智丸以下六人だけが、夜道をかけて堺へ急いでいた。いきなり堺へ船を入れることを避けたのは、人目につくのをおそれたからだった。

曾呂利と那智丸のあいだに、今日どんな話があったのか、五人は知らない。ただ、曾呂利屋敷を出るとき、大岸七太夫から、大場甚内という浪人を討取ってくれ、と頼まれたのは、五人も聞

いている。

余命いくばくもないといわれる曾呂利伴内が、故郷の堺に帰ってきたのは、豊家ほうけのために最後の奉公をしよう、という考えに違いないし、那智丸が曾呂利と連絡を取っているのは、この五人にも想像のつく事であつた。

「小次郎と敵になるとは」

ひとりが聞き返したとき、座敷に、どやどやと遊女や店の男たちが入ってきた。

「ただ今はどうも、有難う存じました」

と、この千守のあるじの長左衛門という男が、いく度も礼をいった。

さっきの浪人は、初音もこわがつてよりつかないので、ひとりで酒をのんでいるという。さすがに大場甚内という本名ではなく、ここでは大川という変名を使っている様子だった。

那智丸も、千守の店では、滝さまという変名で呼ばれている。あるじの長左衛門が熊野の生れであり、那智丸の秘密を守る人間だけに、和泉丸の男たちも安心して遊びに来ていた。

高間という、この店で一ばんの遊女が、那智丸のそばに坐つた。下ぶくれの、はつきりした眼鼻立で、品も備わり、芸もあるので堺の富商たちのあいだに人気があつた。

こういう遊びの席でも、那智丸は、笑い顔一つ見せず、黙って酒をのんでいた。その那智丸が急にきらつと興味をそそられたように眼を光らせたのは、いま、ひとりの女が座敷へ入ってきたときだった。

それが遊女でないのは、髪形を見てもわかるし、酒を運んで入ってくると、那智丸たちへていねいに会釈えいしやくをして、膳の上のものを目だたぬように片づけはじめた。

もう二十四五になるだろうか、伏目勝ちに動いていながら、その顔にはねとつとした色気がある。眼鼻立は、この座にいる遊女たちにもおとらぬ美しさだが、手が女にも似気ない太さなのが、すぐに那智丸の眼についた。

その女は、すうっと風のように入ってきて、てきばきと働くと、また風のような動きで座敷を出ていった。

「いまのは」

と那智丸は、何気ない調子で、あるじの長左衛門に聞いた。

「中働きに、やとった女でございます。もう十日ほどにもなりましょうか。よく働きますし、芸の心得もある様子なので、店から勤めに出たら、とすすめますと、亭主のいる身だから、という返事で」

「名は」

「さく、と申しますが、何かご用でも」

「いや、なんでもない」

といったきり、那智丸は、今の女のことに触れようとはしなかった。

酒盛りがすんでから、和泉丸の男たちは、めいめいの相手の遊女といっしよに、この座敷を出て行き、那智丸と高間だけが残された。

もう陽が斜めになって、障子が赤く染まり、庭の立木の影を映している。ときどき屋根から、ざざつと雪の落ちる音が聞える。

「障子をあけてくれ」